

友人関係の親密化に及ぼすシャイネスの影響

石田 靖彦

〈問題と目的〉

シャイネスに関する研究は、Zimbardo (1977) の一連のシャイネス研究以来、多くの実証的な知見が蓄積されてきた。例えば、行動的側面では、口数や視線交叉の少なさ、不必要な身体操作などの抑制的な行動傾向が見出された (e. g., Daly, 1978; Pilkonis, 1977)。また、認知的側面では、自他に対する否定的な認知や自己卑下的な帰属スタイルなどの否定的な認知傾向が指摘されている (e. g., Anderson, *et al.*, 1985; Clark, *et al.*, 1975)。しかしながら、これらのシャイな人の行動的・認知的特徴は、多くが未知の他者を相手とした実験室実験で見出されたものであり、彼らが実際にどのような友人関係を有しているのか、また、どのような相互作用を営んでいるのかについての研究は乏しい。特にシャイな人の友人関係の親密化過程については、ほとんど研究がなされていない。

本研究では、シャイな人が実際の友人関係の親密化過程において、どのような相互作用を行い、どのような親密化の過程を辿るのかを明らかにすることを目的とした。

ところで、友人関係の親密化は、行動・認知・感情など多次元にわたるプロセスとして捉える必要がある (Hays, 1985)。“分かり合っている”“支え合っている”などの“親密性の認知”は、相手とさまざまな行動や活動を行ない、それらを共有していく中で徐々に形成される。さらに、その後の相互作用は、その“親密性の認知”に基づいて展開される。つまり、友人関係の親密化とは、『相互作用の蓄積→親密性の認知の形成→さらなる相互作用の展開』という一連のプロセスであり、そこでは“親密性の認知”が重要な機能を果たしているといえる。そこで本研究では、友人関係の親密化を捉えるにあたって、両者間で展開される“相互作用”とその相互作用によって形成される“親密性の認知”に焦点をあてた。そして、親密化過程において展開される“相互作用”、および“親密性の認知”が、シャイな人とシャイでない人でどのように異なるのか、さらに“親密性の認知”がその後の相互作用に及ぼす影響について、縦断研究を含む3つの研究によって検討した。

〈研究 I〉

目的：大学での友人関係において広く行われている行動

や活動を収集し、これらの行動や活動と“親密性の認知”との関連を検討する。さらに、シャイな人とシャイでない人の友人関係の違いを、予備的に検討する。

方法：大学新入生124名（男性72名、女性52名）を調査対象とした。“大学に入って知り合った、もっとも親しい同性・同年輩の友人”をひとり想起させ、その人物に対して“知り合ってから今までに行なった行動（＝相手に対する行動）”と相手に対する“親密性の認知”を測定した。調査時期は、大学入学後約8ヶ月を経過した1995年11月であった。

結果と考察：“相手に対する行動”81項目について、主成分分解による因子分析を行なった。その結果、“共行動への勧誘（30項目）”“コミュニケーション（14項目）”“学習活動（20項目）”の3つの因子が抽出された。これらの因子は、従来の知見とほぼ対応関係にあることが確認された。また、これらの行動カテゴリと“親密性の認知”との関連を検討したところ、いずれのカテゴリとも有意な正の相関が認められた。以上の結果は、相手との“親密性の認知”判断が、相手との間で営まれた相互作用をもとになされていることを示しているといえる。

シャイな人とシャイでない人の友人関係の違いについては、男性に限り、シャイな人ほど“相手に対する行動”に乏しく、“親密性の認知”も低いことが明らかとなった。このことは、シャイな人ほど新たに親密な友人関係が形成できにくいことを、行動・認知の両次元で示しているといえる。

〈研究 II〉

目的：大学で新たに形成された友人関係について、シャイな人とシャイでない人でどのように異なるのかを、“相互作用”と“親密性の認知”の推移という観点から縦断的に検討する。さらに、ある時点の“親密性の認知”が、その後の相互作用に及ぼす影響についても検討を加える。

方法：大学新入生156名（男性97名、女性59名）を調査対象とした。“大学に入って知り合った、もっとも親しい同性・同年輩の友人”をひとり想起させ、その人物との“過去3週間の相互作用”“今現在の親密性の認知”を、大学入学後1ヶ月後、3ヶ月後、5ヶ月後の3回に

わたって縦断的に測定した。

結果と考察：大学で新たに形成された友人関係は、全体的な傾向として、知り合ってから期間が長くなるほど、多くの“相互作用”が営まれるようになり、それに伴って“親密性の認知”も上昇していくことが示された。これは、Altmanらの社会的浸透理論（1973）に一致した結果といえる。

シャイな人とシャイでない人の友人関係の違いについては、シャイな人ほど、1ヶ月、3ヶ月のいずれの時点でも、少ない“相互作用”しか展開しておらず、“親密性の認知”も低いことが示された。このシャイネス高・低群間の違いは、入学後5ヶ月の時点でも認められた。さらに、シャイな人の低い“親密性の認知”に及ぼす要因について、(1)相互作用の少なさ、(2)否定的な認知という観点から詳細に検討した。その結果、シャイな人の低い“親密性の認知”は、“相互作用”の少なさだけではなく、それらの相互作用を否定的に認知することによって生じていることが明らかとなった。また、この傾向は特に、関係の初期の段階ほど顕著であることが示された。これらの結果は、従来実験室実験で見出された、(1)対人行動の抑制傾向と(2)否定的な認知傾向という、シャイな人の行動的・認知的特徴が、実際の友人関係の親密化過程においても生じていることを示している。ただし、このような低い“親密性の認知”によって、その後の相互作用の展開が阻害されるという点は、支持されなかった。

《研究Ⅲ》

目的：大学で新たに親密な友人関係を形成できないことが、どのような心理学的な問題を引き起こすのかについて、孤独感という観点から検討する。

方法：大学新入生207名（男性102名、女性105名）を調査対象とした。“大学に入って知り合った、もっとも親しい同性・同年輩の友人”をひとり想起させるというもので、研究Ⅱに準ずる。“相互作用”については、“知り合ってから今までの相互作用”を測定した。調査時期は、大学入学後3ヶ月後の1996年7月上旬であった。
結果と考察：大学入学に伴う孤独感は、大学で新たに形成された友人との関係のあり方（“相互作用”と“親密性の認知”）によって、大きく説明されることが明らか

となった（男性：46%、女性：38%）。また、シャイな人の友人関係ほど、“相互作用”に乏しく、“親密性の認知”も低いことが再確認された。さらに、シャイな人の低い“親密性の認知”は、“相互作用”の乏しさだけではなく、否定的な認知によって生じていることも再確認された。つまり、シャイな人ほど多くの“相互作用”を展開することができず、それらを否定的に認知するために、低い“親密性の認知”しか形成できない。その結果、大学入学に伴って、高い孤独感を感じているといえる。

《総合的考察》

本研究では、シャイな人の友人関係の親密化について、“相互作用”と“親密性の認知”という、行動・認知の2側面から検討した。その結果、①知り合ってから期間にかかわらず、シャイな人ほど少ない相互作用しか展開できておらず、親密性の認知も低い。②シャイな人の低い親密性の認知は、単に多くの相互作用を展開できていないだけではなく、それらを否定的に認知することによって生じている側面がある。ただし、親密性の認知がその後の相互作用に及ぼす影響は認められず、③シャイな人の友人関係で多くの相互作用が展開していかないのは、必ずしも低い親密性しか感じられないことによるわけではないことが示唆された。さらに、大学で新たに友人関係を形成できないことによる影響として、④シャイな人ほど、多くの相互作用を展開することができず、高い親密性を感じることができないために、高い孤独感を感じていることが示された。

従来のシャイネス研究によれば、シャイな人が親密な友人関係を形成できない要因として、“対人行動の抑制傾向”と“否定的な認知傾向”が考えられる。しかし、本研究では、“親密性の認知”がその後の相互作用に及ぼす影響は認められていない。従って、シャイな人の友人関係の親密化を阻害する要因としては、“否定的な認知傾向”よりも、むしろ“対人行動の抑制傾向”が大きな影響を有していることが示唆される。

今後の展開としては、シャイな人の“対人行動の抑制傾向”をより詳細に検討するとともに、シャイな人を取り巻く“仲間集団”“仲間関係”という観点からの検討が望まれる。